

上野通明さん応援レポート 「シャネル・ピグマリオン・デイズ2016」 2016年8月27日(土) シャネルネクサスホール

シャネル・ピグマリオン・デイズ後半シリーズ

「シャネル・ピグマリオン・デイズ」。

東京・銀座のシャネルビル内のホール、シャネル・ネクサス・ホールにて開催されているこのシリーズ、若手のアーティストに演奏機会を提供するプログラムである。

演奏会の名称は、シャネル社創始者であるガブリエル・シャネルが「ピグマリオン＝才能を信じ、支援して開花させる人」だったといわれていることからのネーミング。無名時代の芸術家達の支援を続けた「ピグマリオン」ガブリエル・シャネルのスピリットを踏襲して続けられている「シャネル・ピグマリオン・デイズ」。

ちなみに、シャネルが支援した無名時代の芸術家には、パブロ・ピカソ、イーゴリ・ストラヴィンスキー、レイモン・ラディゲ、ルキノ・ヴィスコンティ、ジャン・コクトーら、そうそうたる名前が並ぶ。

各年5名ほどの若手演奏家を支援するこのシリーズ、2016年はその中に、チェロの上野通明さん、ヴァイオリンの城戸かれんさんの財団奨学生2名が選出されている。1月からの1年間に各々、シャネル・ネクサス・ホールにて年6回の演奏という素晴らしい機会をいただいている。7月からは後半戦がスタート。上野さんは本日の回が4回目の登場となる。

6回の演奏会のプログラムは、各々のアーティストの自由に任されている。テーマ構成や選曲にも興味がわく演奏会だ。



会場のシャネル・ネクサス・ホール。ブランドロゴと同様に、黒と白で統一されたホールはとてもシックな空間。プログラムも黒を基調に制作されており会場内一帯が洗練された雰囲気。

台風が気になる天候もなんのその、客席は超満員。回を重ねていらしてくださるお客様も。

上野さんはこのシリーズ、「バッハの無伴奏チェロ組曲」1番～6番全楽曲を、各回一つずつ聴かせてくれるという粋なプログラムを組んでいる。4回目の本日のプログラムは、バッハ第4番と、フランクの「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」の「チェロとピアノ」バージョン。ピアノは島田彩乃さんである。



バッハ無伴奏チェロ組曲と今弾きたいソナタと



上野さん拍手に迎えられて登場。
1曲目は無伴奏曲、バッハが始まる。
「…4番はプレリュード(前奏曲)がかたち
にしづら曲だなあと。8分音符の分散和
音(和音の各音を、同時ではなく分散して
順次に演奏する和音)が続いて…」
「…うまく弾けたら教会のオルガンのようなイメ
ジなのではないかと思っているのですが」
と上野さん。渋い低音も深く響き、柔らかく
巧みに弾ききった。

続いて、ピアノの島田彩乃さんも登場され、
恒例のトークが挟まれる。
「…毎回バッハの無伴奏チェロ組曲から
ひとつ、それと今弾きたいと思うソナタを選
んでいます」とプログラムの説明。
「…次に弾くフランクのソナタは、ヴァイオリ
ンとピアノを前提に作曲されているので
すが、これをチェロで弾きます。それなりに
弾きにくい部分もあったりするのですが、
チェロで弾くことにより、さらにしっとり、し
っとりするところもあります。そんなところを楽
しんでいただけたらと思います」
「今までにも何度もご一緒している」という
島田彩乃さん、バイオレット基調のドレスが
お似合いだ。

2曲目、フランクのソナタが始まる。友人で
ある音楽家イザイの結婚式に捧げたとい
われる曲である。チェロの演奏で聴くとまた
違ったイメージ。さらに落ち着いた深みが
表現され、ピアノとの調和の美しさもあい
まって、一段とおとなっぽ曲に感じられた。

大きな拍手に促されてのアンコールは
フォーレの歌曲「夢のあとに」。

「…歌曲なのですが詩が素晴らしくて。夢
が覚めてしまって、それを嘆いていると
いった内容なんです。曲と詩がとても
合っていて。詩を知ってから大好きになっ
た曲です」と上野さん。

宗次コレクションから 5月から貸与してい
ただいている新しいチェロも良く鳴って、馴
染んできているなあ…と聴いていたら、
なんと。

1曲目のあと、やや腱鞘炎のような状態に
なり、楽屋で懸命に冷やしての演奏だった
とのこと。舞台での飄々とした姿の裏で大
変な事態が起こっていたと聞き、驚くやら、
それを微塵も感じさせない演奏ぶりに感
心させられるやら。



もっともっとイメージに近づけていきたい



終演後のお二人です

終演後、上野さんに話を聞いた；

— 本日の演奏、思い通りに？

「・・・バッハは、まだまだ研究の余地があって。もっともっとオルガンっぽく弾けるようにしたいです」

「・・・フランクは曲の良さを出すように心がけて。お客様に喜んでいただけるように弾きたいなと思いながら弾きました」

「・・・結婚式に捧げた曲なのですが、始まりの曲調が結婚式とはまた異なるイメージで。なぜなのかなあと、そんなところにも思いを寄せながら弾きました」

— ヴァイオリンの曲をチェロで弾く；

「・・・ヴィルトオーゾ・ピースのバイオリン曲です。チェロのほうが楽器が大きい分、左手を動かす幅も大きく、そういうところがやや大変です。でも、チェロの演奏で聴いていただくと、また曲の違った面を感じていただけるのではないかなと」。

— 新しい楽器は；

「・・・以前の楽器とは性格的にはほぼ反対の感触です。パワーがあって、特にコンツェルトに向いているように思います。新しい一台に愛を注いでいきます！」

「・・・楽器が新しくなり、以前のものよりも幅が広く、駒が若干高いこともあって、今日のバッハは最後のほう左手がパワー切れ。自分としてはちょっと残念でした」。

秋以降も春先にかけて演奏会の予定がびっしり。留学先のデュッセルドルフと日本を往復する日々が続く。

「ありがたいことです。ひとつひとつ丁寧に弾くように頑張っていきます！」と、元気に抱負を語ってくれた。

上野さん、素敵な演奏でした。
また、聴かせてください！



<演奏会概要>

◆出演

上野 通明[チェロ]

島田 彩乃[ピアノ]

◆プログラム

バッハ: 無伴奏チェロ組曲 第4番

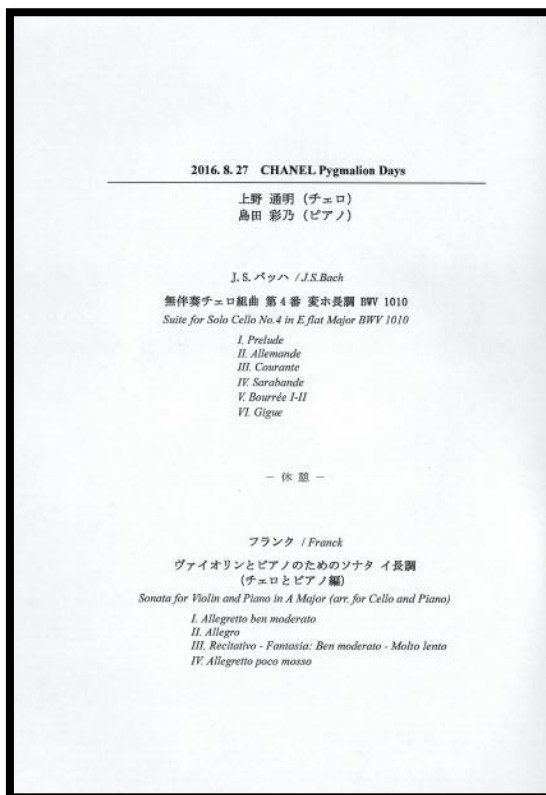
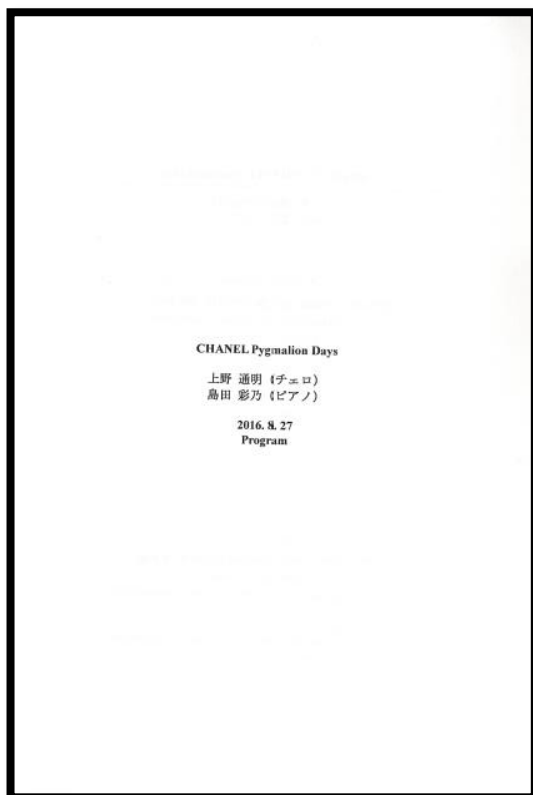
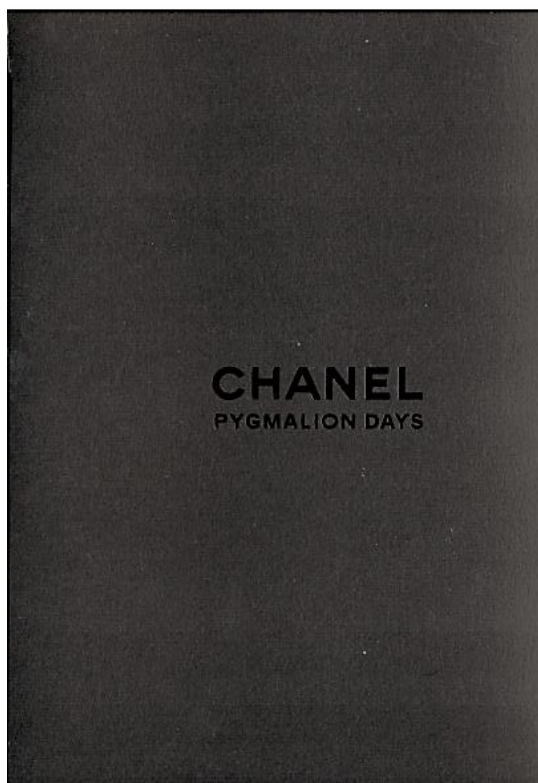
変ホ長調 BWV 1010

フランク: ヴァイオリンとピアノのための
ソナタ イ長調(チェロとピアノ編)

◆アンコール

フォーレ: 歌曲「夢のあとに」

【コンサート・プログラム(表紙・1～2ページ)】



【コンサート・プログラム(楽曲解説)】

解説

◆ヨハン セバスティアン バッハ
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

無伴奏チェロ組曲 第4番 変ホ長調 BWV 1010

バッハはバロック期を代表する作曲家で、数多くのカンタータ、オラトリオ、オルガン作品、器楽作品を残しています。後世ベートーヴェンを始め、モーツァルト、ショパン、シューマン、ブラームスなど大作曲家たちに大きな影響を与え「音楽の父」と称されています。また、バッハ一族は多くの音楽家を輩出してはいますが、なかでもその偉大な功績からヨハン セバスティアンを特に「大バッハ」と呼ぶこともあります。

無伴奏チェロ組曲は、第1番 (BWV1007) から6番 (BWV1012) まで全6曲あり、全ての組曲がそれぞれ一つの調性で書かれています。更に組曲の構成は、前奏曲、アルマンド、クーラント、サラバンド、メヌエット（またはプーレ、ガヴォット）、ジークの舞曲の形式に則っています。当初、練習曲と目された組曲でしたが、スペインのチェロ奏者カザルスによって、チェロのバイブルとなる楽曲として評価され、現在では多くの演奏家の金字塔になっています。どの曲も舞曲としての形式はあるものの、その音楽的構成は多声的であり、複雑な色合いを醸し出す名曲です。

曲番を追うごとに難しくなるというバッハのチェロ組曲ですが、この第4番から特に技術的難易度が高くなっていきます。変ホ長調のどこか寂しげな明るさを持つ調性が短調に変化していくなど、曖昧さを含むような曲想が特徴的です。広い音域の中での頻躍や軽快なリズム変化など、チェロという楽器を最大限に生かす技術が駆使されています。

◆セザール フランク
César Franck (1822-1890)

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 長調 (チェロとピアノ編)

現在のベルギーにあたる、ネーデルラント連合王国に生まれたフランクは、幼い時からそのピアノの才能を見出され、パリ国立音楽院でピアノ、オルガンを学びます。演奏家にさせなかった父親から離れ、フランスで作曲家を目指し、宗教音楽やオラトリオを発表しました。生前には作曲家としての評価は振るわず、晩年から没後に脚光を浴びることになります。1871年には、フランスの作曲家サン＝サーンスやフォーレと、フランス国民音楽協会の創立に寄与しました。交響詩「鷹」や、オラトリオ「聖墓」、ヴァイオリン・ソナタなどの代表作があります。ワーグナーやリストの影響を受けつつ、ドイツ音楽とは異なる独自の音楽性も持ち、フランス近代音楽の道筋を作りました。この曲は、同郷のヴァイオリニスト、ウジェーズ イザイの結婚式に献呈された4楽章構成のソナタです。唯一のヴァイオリン・ソナタ作品ですが、彼の優れた和声技法、美しい情景が浮かぶような各楽章の特有的な表現法は、彼の最高傑作と言われる所以でしょう。晩年である64歳の作品で、円熟したフランク独特の作風に魅了されます。

ピアノとヴァイオリンの他にも、チェロやヴィオラ、フルートなど、多くの楽器に編曲されている、人気の高い作品です。

解説：CHANEL Pygmalion Days プロデューサー 坂田 康太郎

【コンサート・プログラム(プロフィール)】



上野 通明

Michiaki Ueno
Cello

バラダグアイに生まれ、5歳よりチェロを始める。幼少期をスペイン、バルセロナで過ごし、数々のコンクールで優勝または入賞。2009年13歳で第6回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際音楽コンクール、日本人初の優勝。翌2010年第6回ルーマニア国際音楽コンクール弦楽器部門最年少第1位、ルーマニア大使館賞、ルーマニアラジオ文化局賞を併せて受賞、ルーマニア各地で6回の連続演奏会に出演。2014年第21回ヨハネス ブラームス国際コンクールチェロ部門第1位。

これまでに新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、ロシア交響楽団等国内外のオーケストラと多数共演。テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHKBS「クラシック倶楽部」、NHKFM「リサイタル・ノヴァ」等に出演。宗次エンジェル基金、ロームミュージックファンデーション、江村記念財団奨学生。岩谷時子音楽文化振興財団より「第1回Foundation for Youth」、「第6回岩谷時子賞奨励賞」受賞。日本ヴァイオリン特別楽器貸与対象者。現在桐朋学園ソリストディプロマコース（特待生）、デュッセルドルフ音楽大学コンツェルトエグゼメンコースにて、毛利伯郎、ピーター ウィスベル ウェイ両氏に師事。



島田 彩乃

Ayano Shimada
Piano

桐朋女子高等学校音楽科を首席で卒業。パリ国立高等音楽院、同研究課程、エコールノルマル音楽院修了。その後、文化庁海外留学制度研修員としてライプツィヒ音楽大学にて研鑽を積む。これまで、ジャン・フランセ国際音楽コンクール、シドニー国際ピアノコンクールをはじめ、国内外数々のコンクールにて優勝、入賞。パリ在住時より、フランスおよびヨーロッパ各国、日本、また南アフリカ、チュニジアにおいてもフェスティバルに招かれリサイタルを行うほか、シドニー交響楽団、ヨハネスブルグ交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団等オーケストラとの共演、TV・ラジオ出演など、多岐に亘った活動を行っている。CD『ドビュッシー/デュティユー/ラヴェル』をリリース。デュティユー氏本人から賛辞が贈られたほか、各誌にて高い評価を得る。2011年帰国。ソロのみならず室内楽にも精力的に取り組み演奏活動を行うと同時に、大学講師、コンクール審査など後進の指導にも当たる。帰国後も欧州のフェスティバルに招かれリサイタル出演、マスタークラス講師等、海外でも継続して活動を展開している。故郷岡崎市、須田真美子、ジャン＝フランソワ エッセール、アレクシス デル＝ヴィーニュ、ジャン＝クロード ベヌティエ、ゲラルト ファウツの各氏に師事。上野学園大学講師。